

# 絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

てお話ししようと思います。

この寺院には、19世紀の画家、ミッシェル・デュマによって描かれた、計7枚の大きな壁画がありました。それらは、漆喰の壁に、鉛白ペーストによって貼り付けられた（この事をマルフラージュと呼びますが、この時代にはこの鉛白で裏打ちされた絵が多く、鉛はエックス線を通さないため、検査が不可能となり、修復家泣かせの手法なのです。）麻布に描かれた油彩画でしたが、長年のロウソクによる煤のために画面真っ黒となって汚れていました。

高さ約5メートルの処にあるこれらの壁画を修復するために、寺院の内陣には足場が組まれ、まだ高い場所での作業に慣れない私の体に師匠は命綱を巻き付けてくれました。実際に大男の師匠が急に他の板に移動したりすると、私はシーソーの様にはじき飛ばされて、何度か宙ぶらりんになる、と言うハメに陥りました。が、何とか高さにも慣れ、夢中になって汚れの下から鮮やかに蘇ってくる絵具を追い始めた頃、それは聖



今回は、そういったルーブル以外での仕事の中でも印象深かった、パリの18区にあるノートルダム・ド・クリニャンクール寺院壁画の修復についてお話ししようと思います。



高さが5メートルの処にあるこれらの壁画を修復するために、寺院の内陣には足場が組まれ、まだ高い場所での作業に慣れない私の体に師匠は命綱を巻き付けてくれました。実際に大男の師匠が急に他の板に移動したりすると、私はシーソーの様にはじき飛ばされて、何度か宙ぶらりんになる、と言うハメに陥りました。が、何とか高さにも慣れ、夢中になって汚れの下から鮮やかに蘇ってくる絵具を追い始めた頃、それは聖

元の高さ約5メートルの処にあるこれらの壁画を修復するために、寺院の内陣には足場が組まれ、まだ高い場所での作業に慣れない私の体に師匠は命綱を巻き付けてくれました。実際に大男の師匠が急に他の板に移動したりすると、私はシーソーの様にはじき飛ばされて、何度か宙ぶらりんになる、と言うハメに陥りました。が、何とか高さにも慣れ、夢中になって汚れの下から鮮やかに蘇ってくる絵具を追い始めた頃、それは聖

ます。

ところで、この作品の修復中に、もうひとつの新しい発見がありました。

それは、私が仕事をしている際に気が付いた事でした。画面中に描かれた一人の男の人の視線が、私がどう動こうとも、見つめかえしてくるものだったのです。それが大変気掛かりで、ちょうど国立図書館に司書として勤める友人がいたので、色々調べて貰ったのです。すると、この人物が、この絵を描いた本人、ミッシェル・デュマその人である事が判ったのでした。（このような事に、ダビッドのナポレオンの戴冠の作中人物の話がとても有名です。）

ともかく、この時は、私はちょっとお手柄を立てたのです。しかし残念なことに、ここでの修復中に、教会のことですからある日、お葬式があった、その真っ只中で私はまたもやミノムシ状態となって（つまりまた足場から落ちたんですね。）参列者の頭上で揺られてしまったのです。その日以来、私は神父さんに「おはよう」と言って貰えなくなっていました。☆

まあ、この教会で、修復について、いろんなことが学べて良かったんですけれどね。

それでは、今回はまたまた地方出張の時のお話、リモージュ美術館での体験を書きたいと思います。（つづく）